三皇和歌集 萃

544
サ
26

春之部

歳中立春　立春　立春風

立春暁　立春朝　閑立春

春風春水一時来　春色従東到　貴賤迎春

早春風　早春霞　早春朝

早春山　山早春　關路早春

早春水　河早春　早春浦

都早春　早春鶯　初春

初春霞　初春風　初春雪

九州大學圖書
九州大學圖書館 昭24.7.13 184033

初春山
初春松
初春祝道
初見鶴
陽春布德
毎山有春
江山春興多
野澤始迎春
瀧音知春
松色春久
春竹契久
家々瀧春
春至管絃中
心静酌春酒
氷始解
子日
霞
霞知春
霞添春色
朝霞
山霞
霞満山
山朝霞
嶺樹霞
霞中瀧
関路霞
野霞
野外朝霞
橋霞
海上霞
海上晩霞
海邊霞
霞春衣
初春鶯
鶯知春
毎朝聞鶯
暁鶯
暁更鶯
朝鶯
鶯出谷
聞路鶯
故郷鶯
松間鶯
竹鶯
鶯新年語
春情有鶯
鶯有度音
若菜
原若菜
澤若菜
多春採若菜
春雪
春雪似花
岡残雪

木残雪
餘寒
餘寒風
梅始開
栽梅
梅花風静
梅薫風
暁梅
夜思梅
梅香
梅満山
里梅
隣家梅
故郷梅
梅花薫砌
梅香留袖
軒梅
柳辨春
柳辨春色
春色柳先知
柳絲緑新
路柳
橋邊柳
岸柳
故郷柳
若草
春草短
野春草
春月
春暁月
春曙月
春月幽
峯春月
河上春月
春曙
夕春雨
帰雁
帰雁似字
鳫勝喚子鳥
雲雀落
糸櫻
花
待花
初春待花
尋花
初花
花始開
花盛
見花
静見花
翫花
夕花
暮山花
嶺上花

翫花
故郷花
閑居花
松間花
依花待人
花慰老
花匂
花色
落花
落花随風
毎年愛花
毎年花有約
花契多春
春日遅
三月三日
梨花
山梨花
春日望山
摘菫菜
水邊蛙
田蛙
苗代蛙
夕苗代
山田苗代
水邊苗代
躑躅
躑躅紅
款冬藏橋
嶋款冬
庭款冬
水邊藤
池藤
江藤
暮春
暮春水
暮春藤
山殘春鶯
兼惜春
殘春少
春松
山家春
稲荷詣

春

仙洞御製

歳中立春

暮ゆく日数もまたく新まれの年の尾かけて春やたつらん

去年しかはほしまたぬ日数をも婦たつみよにわくるつゝ

立春

あら玉の光りもかくく照る月の去年と今年のさかひなる身

きしかたに立かへりけり春されは分け来るこの花も春たる年

立春風

氷とく池のけれ能風の婦くにこそくる春やしるらん

立春暁

一夜ねも年立かへるくぬ暁のうれ初る春を迎ふにや

立春朝

鶏もよひ鳴れる鳥のこゑしきも浦まれ春や立らむ

関立春

関の戸は越明し八重もこえぬるや阿小坂山の峰に霞むらん

春風春水一時来

うち氷かへるゝ池に浪たゝく峰吹風河春なるらん

春色浅未到

色ふかし昨日数越ゆるくゝ吹く春の初色

貴賤迎春

のこるそ都の隅もむへぬも誰くぬ春に逢や峰ぞ

早春風

咲かぬる梅もことわも冬枯の枝にやゝ咲く春のめの春風

色けさを花鶯のまゝくわと浦ちるくゝかゝぬ春の柳風

大空は雪もかゝる山風も都の春にけさは吹らん

早春霞

海山のいつくかさまよひ朝日影霞にわかる浪も春めかしき

山の端にのほるも春のかすみや□□て□□□□し

早春湖

□□春の□□の□□見湖□□八□□□や□世□□□し

早春山

河□□の山□□□□□の根も霞□□や春□□□ん

山早春

□□く霞□□この日影にも春□□□けり山□□□ん

関路早春

夜のほとに春や□□□□□関の□山の□霞□□

早春水

□□も春□□□□□□□□□□□□□□□やくと□□□

河早春

春も今□□□の□山の□に雪消□□□□□□□□

早春浦

春はまたぬとし霞も今□□□の浦の□に影へて□□月□□

郊早春

うち日さす都□□□□□くの□□□□春□□□□□□□□

早春鶯

朝霧のたつさへいとはぬ鶯や谷のとの春告くる

初春

花鳥も同しこゝろにいまや長閑の代にあへる春は

初春霞

色にほふ光ぞ春は今朝の山高もさかりの霞見つゝ

のどけさや実にうつくしいつとも春の霞ハわかぬ光よ

松たてる霞の神の春たつ神世のむかしの山高よ

春の色の神し得ぬやまに天津風そよぐ

初春風

若雪の枝に積るもとけて春風の春の初の色

初春雪

春来ぬと告る朝の梅の香も風にまかせ春や村消

かへる春の道のたよりの鶯の花の峯の雪消

初春山

のどけしな春の山のこずゑみどりの林によする春風

初春松

枝の雪きえつゝ消る緑春にやつるく春風の色

春にあふ世のちとせをかぞへて松の風や春の

初春祝道

天の下出雲八重の色しあまた八神代のきみに春にほひかな

初春見鶯

氷とく池のこころにすむ鶯なれとその歌もたえぬことの葉

湯春布徳

あめつちのあまねくそそぐ春の光にはくさきもなびくやみえん

毎山有春

霞むは日ならべく大川の山城もみゆるや心の春に成世紀

江山春興多

春風に柳なびく山もとの河にならぶ笛の声もなほ節見

野澤如迎春

春の水ながれそめにほふ河澤風ものどかなる春に吹もかへる迄

湖音知春

石たつる湖にさざなみ春風に湖のさざなみ氷とけりし

松色春久

百代やたえぬ人のよろづ代に松葉かへぬ若松の春に契るらん

春竹契久

春の色なるわにあらく契友となれや竹の代々の鶯な濱

家々欲春

まちわひく春まちしもつのをかるゝ我家の園の花や咲らむ

春到管絃中

糸の音も人の心の花咲て世にやさける春へあひつゝ

心静酌春酒

まつくよの長閑なる代も酌々て春を薬の盃のつま

氷始解

薄氷こほりしけさやあともなく見る池の春風にとけ

こけむしろ汀なわはゝ春網はるく氷よいはくとけのさゝ浪

子日

若菜つむ野の日影松にひきとまて齢もちくの春依はん

引く敷ゆくらしも多く春に今日子日せん

霞

かすみし嵐も雪も埋もれて春の立る空しく霞み行

せいかゆの霞の神よあまねくあかつき春の書を取る

霞知春

此山の花にもみちぬ春日や今朝は霞の空に立らん

いつの間に春も知くゆる夜の光の消るを取るを見て

霞添春色

小塩やまは霞ふかくも春の日の光よわたる光なりけり

湖霞

晴の日はにほの海の面かすみて尾のうくもなきとなさけなし

浦遠くなかめてみれやつきせぬ波風もさえたる湖のさゝなみ

山霞

春の色をさらやはこの峯の霞立そめし四方の山の峯に霞も

ときつ風吹くものゝ浪との春はなみにたつさゝ山の端に見ゆ

霞満山

さほの霞は山の姿すらく峯とさへもわくなかりけり

山湖霞

のこりしは湖日こそまさる山よりは紅にとなりて霞かな

嶺樹霞

筑波山峯の霞の春の色にゆつるまつ下もいやましぬ

霞中猶

さほ姫の霞の衣春の日にさらすはやいつくなりけん

関路霞

芦の戸にゆふやまへ行くなかくあつける山は霞庭はるよ

野霞

朝なく雪けの草の中よりも霞わたれる春日野の原

野外朝霞

みこしなくのこる出原は末遠て山も霞ぬ出る日の影

橋霞

夕霞いさよふ浪に影深く見えぬハたえぬ宇治の川はし

海上霞

海士衣春の汐もの浦浪やかすみにまかせてよさるみるめかる

海上晩霞

海原なるも汐曇りて見えし海ハ只暮て夕や霞渡らん

海辺霞

影ひやる有礒のうらの夕かすみ霞よするよする沖津白浪

浪風も吹よせて示めぐる汐の浦のいそ辺は立つ浪の如

朝な〳〵見る海つら遠く漕ぐみるめのかりて霞や立る

霞春衣

海原や立春の霞小なる衣のあやかへしても霞すまで

初春雪

春さの朝け春霜る知らざく雪乃さ春つる空の名もなき

春つけてけさ鶯の鳴声をきゝてやおもひあまる神の初聲

鶯知春

春風のふくあしたは梅の香も袖のへにのみ鶯の鳴音

毎朝聞鶯

神のます杜の鶯朝なく声絶せぬ花の影もとめつゝ

暁鶯

明わたる鶯の音をあかすくく春の夜の夢路の名残をしむ鶯

暁更鶯

鶯のなくこゑも霞とまかふや暁ふかくはた夜こそ鳴ぬらん

朝鶯

鶯の初音も来て鳴やことに朝霧の深き竹の園ふ

新しき宿の春知る鶯の今朝の初音やそのこと葉

鶯出谷

春きて菜摘し昔ならん雪も惜しみさそひや出る鶯

関路鶯

行やらぬ峰の戸ざしの文の坂に春の関守鶯の声

故郷鶯

春霞色増る鶯の都ならむ声ふるさとに来くや鳴

松間鶯

咲くちるかこゝは雲の梢にも花こそやいろし鶯の声

竹鶯

せる春は鶯のなく窓の竹もさらば世をやうき節しなまん

鶯入新年語

鶯の鳴音も霞そひの人にこゝろよするらん歌のこと葉

春情有鶯

たのしさは梅も柳もおちこちに植し垣ねやなれて鳴鶯

鶯有度音

鶯の声もなかなか又ひとつの雲井の空は音色も流るし

若菜

摘くこし世々のためしに若菜にもつかれぬ春になかれけむ

若菜も摘る道も老にこのわかなに老く猶ものこる

原若菜

七種の数摘とやなかる沢こかくれてもる鶯の下道

澤若菜

明るなみ雪消の沢に立そてつむもすくなく深き沢なる

多春採若菜

万代の春は紫のゆかりまて君か若菜や摘むやさかゆし

春雪

峰は猶しら雪新たなる山風や春もあらしの峰の消ゆまし

春雪似花

春まだき見る色も花と咲きそめて色香なき雪の枝やうき世

庭残雪

春の日のかげもわかぬ庭なれて消えて残るは雪の軒の松

木残雪

深山木は梢にのこる白雪もあらし鳥は雪に春は知らし

鶯

ことし人の春風や谷の鶯のこの頃なくも見ぬ山まて

鶯遠風

春の色をさそひてもうとし梅か枝の香にも尋ねし山風の様朝夕

梅始開

目に見ぬ千代春わかく香の初花も先さく梅のひとえやさか

栽梅

植ゑ人もなくもとても植ゑにやはさすか宿の花の種も

梅花風静

あかぬ香を人にしらせて吹風もいとはぬ春の宿かる夜は

梅薫風

なにはつの宿の梅の春風やいかに匂ひは今も残らん

さほ姫の袖のにほひや春風の手にまかせたる匂ひ残らん

暁梅

いかにせん夜深き夜の梅かゝに寐覚の床の夢の名残

たゞはれぬ夜半の夢もおどろかすさく梅かえの窓の匂ひに

夜思梅

思ひ寝の夢はおどろく梅かゝやうしろの軒の窓ちかくして

梅香

こゝろなく袖にうつれる梅かゝは根こそ風の便りにも似て

我宿に植し昔やおもひ出て年々梅の香を残すらし

梅満山

雲かゝる山の匂ひも霞の山にあまるほど梅かゝの春

里梅

こひしくは里ぞあらしも咲梅の花にたづぬる人もこそあれ

隣家梅

我宿と植しならねど中垣を越えて匂ふ梅も咲ぬる

故郷梅

故郷あれて人もすさめぬ梅かゝは誰か袖にかうつしそめけむ

梅花薫砌

むかしたれ砌ちかくハ植おきし春風にもあかぬ宿の梅かゝ

梅香留袖

あかなくに移しもやせし袖につゝむとすれと人の袖のうつりか

軒梅

宿の軒もあれまくのこしハのちの人なき宿の梅の色

挿辨春

またきやも消ぬるかくれて色ハ春風の青柳かな

柳辨春色

青とハ見るにもあし淺緑のいろにはみえく庭の青柳

春色柳先知

残雪もある庭生ひ柳青も淺ゝ淺ミとりある色になりそて

柳絲緑新

淺緑そめてもするつ糸も新青風の青柳かな

路柳

旅人のあはれむこゝろ旅人のいとまもある青柳の陰

橋辺柳

道のべや流るゝ小川の橋柱もかくるゝ程に青柳の糸

岸柳

浪草もなびく岸ねの糸柳いつも緑は春風の吹

門柳

こえたつる葎の門もけさは春の道しあまたや青柳

若草

あらたまる年のはじめのまきくも若草山の緑まされる

春艸

春きては雪きえし野もけさよ浦わにまかる浦の小草には

春草短

雪しきのみ[illegible]にのこる浦の[illegible]春の若草

野春草

若草も春の緑もしらぬくにかれし雪のまさるに若草

春月

晴やらぬ霞のころも照りわたる月ばかりこそ川も見えぬ

春暁月

幾年か[illegible]月かげむかし夜の霞みのこる夜の[illegible]

さゆかへく浪こえてけふ人もこし勝見渡のうみなれや

春曙月

霞む夜の月もかすかく成てみつしるあけゆくこの空の明ほの

春月幽

わくらくに月かけかすむ川暗ぬ夜の帳とも見えぬ霞哉

春の夜の月も霞のうちにこそ中々まさるくや影の川淀

華春月

花の雲こえてく山の高根より霞出く白き月の影

河上春月

春の夜は吹くや花ちりかたりせにさいつくれ月もかかる

春曙

名の新小部のすきまくるよりあけぬる春の明ほの

夕春雨

つれつれともなくぬるの夕くれあはれのこすゑに霞玉

帰雁

花も待ち人こそあれのちるやみやこのあはの空の雁

帰鴈似字

春霞たちくもかへる雁さはりぬきの塩わた

始る里ハ咲とらくの鶯もよ路こ花や梅の庵

鳥勝喚子鳥

あくまれさハわれなれ小ぞ似て人も何と呼子鳥

雲雀落

あまてらす奴雲雀のうたハ落なれも空ゆくらん夕霞

糸桜

花のとハ人まつかし結ぶ糸桜なれもいくよ来る人ハ

花

こぼれて散るもよしや花盛ゆるし咲日数ふれバ

咲初し山の桜の露より日も花ハ待人ハ花のさき

待花

花ハこく来てまたや咲ものかと人よ桜見よと

初春待花

梅咲や咲句く百姓や風ものどか春なりし

野花

一本咲く端小こまらく和人のくもこまく花の山桜ハ

りみど路こゆ常陸なるし初咲花の山桜ハ花ハ咲こ洒す來

初花

見るもちる花に数ならぬよ名のみかく早くもちよ出むかな

花始開

咲そむる一枝この花に香をまづさそふ風ぞ来にけり

こころも春もおくに人ありて独しも遠く咲そむ

花盛

詠めしも今は花のみにて月も同じ春に花に里を見よ

見花

咲そめし花の色をも見るとしも霞に川

静見花

春風も月も宿の花も吹く家に涼しく雪の流れのと春よ

暁花

花よ見え暁かつの雪の風さへ人を見る河の流れにいふ山

夕花

帰る夕暮いかで入相のこゑに春の暮れぬ花の山寺

高山花

消えしものの流れかけしの高き山路の雪とも見よし

嶺上花

咲つつ花散る苔に峰かくもこそ雲のことよしや雲

関花

いろくの雲ゐせくゆきゝも花見てや許ぬ春の関守

故郷花

みよしのゝさいつる花の色をとくさむら落ぬ世をふる里

閑居花

あひおもハ、數ことなくて閑なる紙宿の花にかへりへん

松間花

春風にさそハれし花ハ、雲に移しも常盤の浪かへハく

依花待人

こハ誰人かこの宿らハ花の陰ぬもあらて人を待にはつらく

花契先

争の中に咲ちる法に咲らくもなや花すてくめきぬ

花句

さほ姫の袖も匂ける花の衣裾も春風の如く

花色

よしや香は梅にゆづるの花にこそ知つもしるまさりけり

落花

あすは又紙のころ桜の木の下にちる散花明日も落くらむ

河やまくの理わなうも数ゆもおまくらや菊の花

落花随風

散ぬるも心の程を見えにけりや風のやとりからても

毎年愛花

年毎に雲井の桜あかなくに今ゆ末の春もまたくらむ

毎年花有約

咲ぬるにちきりぬ花の色深さにおもくやちよの世を経ても

花契多春

契りおくいくよの山のさくらはなあかぬ春にむすひそめて

春日遅

百囀やささぬ門のなかよ日数のうちに長き春の家々

三月三日

おかあみに昔も今もかはらぬや桃の花のさかつき

梨花

雨にぬれぬ花の一枝たをやかに露の枝のなかし

山梨花

あはれなり谷にも月のかけとてや山路の花

春日望山

寂して今もあはゆや芳川夕ち春と飛む山ぢ

摘菫菜

摘たむる袖のすゑにも菫の跡をとゝめてやよすかや紫

水辺蛙

白紙汲ハ節の蛙や水深よ汀の草の稀み生くなく

田蛙

ねし海る表ゑ背日もあら小田小田の蛙も古の根む

苗代蛙

此路の田川しる小田小田く水をよぶらむごとく蛙鳴らむ

夕苗代

水口に清る夕こ露くくる田長やみちまよふらん

山田苗代

色も消こ田しろか田小川くさく山下水の絶めさめなゐ

水辺苗代

さく水の言わもちくまり川ゑ浪や先苗代の種ハまくらむ

瀬濁

思ひあまりとらにやくここちわかやいろ紙のつくしにごりて

瀬濁紅

夕日さす岩邊をいそく江の水しまかこえ紀岸涼しかな

款冬蔵橋

道もせに咲ける紙こそや山吹の花の底なる井手の川橋

嶋款冬

今もなほさかしこ庭くゝる花の小嶋にうつる山吹の花

庭款冬

いく咲もおりし庭なる山吹のやへにしく峯にかへりつる人數

水邊藤

折ことにはなしにすきるゝ春は池の汀の松の藤いも

池藤

岸に咲春風かろく池水の底なる影もなひく藤か枝

江藤

汐のほや江の先々春の海うらこやまたも影にかゝる藤浪

暮春

花鳥の春も今日の夕日影霞はわかれこそまたしらや

暮春水

ゆく春を惜むに生る早瀬川春にも水の流とそ思ふ

暮春藤

簾まく今朝ことにたてゝ見なれし萬の柳の下風

暮春鶯

鳴とむる声ならやいまもむ鶯のちる花なき垣ねの句ひ

兼惜春

雲風に消ゆる月の見ぬ鶯もおしめ夕風春のなごり

残春少

弥生の名残も庭の花よりも春の日数は今いく日か

山残春

かへりにし山路の山路をちらむこも春は幾かの鶯の声

春風

神垣に先咲梅の咲くも花の笑みは白妙の春風

春山

霞ぬる花に川こゝわく春をまちて若葉分ぬ山かけも見し

春松

松かぬ緑にあかぬ春の色や霞む雲間の松の村立

山家春

咲てちる花をも見て浪や山深く思ふ世の春は我に住ぬも

稲荷詣

稲荷山杉の青葉しも二月のさらに新しく今見ゆる哉

夏之部

更衣　朝更衣

林早夏　餘花似春　新樹

餘花　林新樹　卯花

新樹露　路卯花　笆卯花

卯花似月　山葵　郭公

採葵　雲間郭公　雨後郭公

待郭公　郭公數聲　郭公頻

朝郭公　谷郭公　浦郭公

嶺郭公

市郭公　船中郭公　早苗
端午興　池菖蒲　橘
盧橘　盧橘薫風　夜盧橘
閑庭盧橘　對橘問昔　里樗
五月雨　五月晴　江五月雨
瀧五月雨　夏月　夏月易明
河夏月　湖上夏月　浦夏月
竹亭夏月　瞿麦　笆瞿麦
夏草滋　庭夏草　嶺照射

澤蛍　蛍過窓　草蛍
叢蛍　蛍似玉　夕顔
墻夕顔　蚊遣火　閑居蚊遣
隣蚊遣火　池蓮　氷室
山夕立　山路蝉　杜蝉
扇　納涼　納涼忘夏
納涼月　夕納涼　麓納涼
夏秡　貴賤夏秡　六月秡
夏月　夏雨　夏昼

夏夜　夏木　夏杁

夏莚　夏糸

夏

林早夏

ことしはひの海こ涼和り九方も来ぬ君節紀絶九竹の標

更衣

日ぬまみれ多ちかく緑の梅れう涼文衣れ色も涼しま

花のこしくあしぬ世田九節さの神ふも涼し色ハ移ら九

散花の後しもあるく我衣涼し色香すかく待くもに

朝更衣

花れれく入く涼すれけ朝節ねよ出しすくれ花衣ぬ

餘花

こゝに花やちらくにこゝろもうれしきは青葉の陰にさくらなれ

餘花似春

青葉しけ枝をわけて花ちるや折しも春に帰る一もと

新樹

ちるまなく散りし花をもいつましくる若葉の桜ちるなれ

涼しさはまつくこそやこむるしはなひく若葉の露の野風

色ことに生ひる楓のうつみることや若葉の秋の下もみぢ

枝も葉も年ふかひくや二本の木のちりからまる庭の木かけさ

新樹露

明しは若葉の露に風なまじく若葉のぬさ花も涙に涼しき

林新樹

若葉わけあひしくれもし緑も深くこく林なもとの木立かなし

卯花

わけはあへる神よかるての袖の色は涙に卯月は待の白妙

こよひ見はそうしもあらぬは路の卯花月夜誰は涼しよし

雪かとし見る玉川への日影に青葉すくなき卯花

卯花似月

卯の花の月のころや一枝といへるかはにもさかるいとふらん

路卯花

鳥飼の浪越やわたる川辺の里に咲る卯花かな

笆卯花

あけぬとやまがきの竹もわすれし卯花にて咲卯花かくれ

挿葵

かざしつるけふこそしるしもの氏人もいろかはらぬしるしもしく

山葵

むしろ綾ふかき山の今日のためしに葵かざさん

郭公

雲路よりまつほとときすふかくしてなのりかね

待郭公

待人にまちし神山のつまならぬとあるにまちて聞らん

雲間郭公

待えつる雲間の月の夜にまれに聞神山のまとろみもなけき

雨後郭公

夜ぞしるしもこよひむらさめの一声さびしきの声わたるらん

朝郭公

ゆふされは沖つ島もりこゑたてゝ鳴くなるものを山かけの時鳥

郭公数声

郭公なかの涙は袖にぬれにけりいくへの百千返りなく

ほとゝきすひとこゑなれはまたるゝを声をしらぬ人もあらしな

郭公頻

きのふたに鳴くにしもあらぬ郭公の涙はいつしてや鳴

山郭公

おのか山のおのゝ神山をふかみ雲に入りても鳴く時鳥

嶺郭公

世にたかき嶺のおのゝ神山深く雲に入る鳴く時鳥

谷郭公

八月山いつくはあれとこそ時鳥ゆふこ里に独は幸にかくれすみせ

浦郭公

若葉さへ聞くや谷にこもれるもさへ人めの人よ時鳥の礼

市郭公

夜浪たゝこゝそても思し時鳥いつも思の浦をなかく

杜中郭公

さわかしき市小路のものしのひてもまちかねたる人声あまし神声と

時鳥きゝもや夜深き杜に鳴くなるそ明の明尽

早苗

雨そゝく縁にかゝりし若苗を植くる賤か田面なりけらし

端午具

やしなひもよもきあやめの色の香をむすはぬ人は袖かけなまし

池菖蒲

おほゆくもまとの汀かゝるやとこに池より出る菖蒲は

今日まては池水深くあけくれとなほなかき菖蒲草かな

橋

夏ふかき茂るしけみにあやなしの袖の香は匂ひけん

こなたにかくゆる煙も同しその花橘のかほりなるらし

盧橋

いつはりも我のかゝしかたかしもやまよへしたしく句ひ来る

夏の夜の道は橋の香ゆかしき袖もかへすとそおもふ

盧橋薫風

夏は宵の風なのこまやか袖なる香そ頻く句ひきたりけむ

夜盧橋

香ふ句ふおしもかきよせ花のこゝろせめ夜半の枕に

おもしもあまりしきの夜なれは家なきしらぬ花の匂ひきたる哉

かよふ道へもいらし跡たえぬる野辺の小車すさむ

閑庭泉橋

世へだつる池のなかばにわたすはしの跡絶し道にかよふ袖かな

對橋同首

世へだてし岸の柳を宿とせむはしのかけせる縁によふ春

里標

あらし吹梢の雨そふるべく問ずらむ跡はわけもなき里の夕暮

五月雨

月も日も流るゝ影をさかしま山はる浦に久しき五月の雨かな

五月雨を晴るゝ空とは思へども雲こそかゝる里の晴間は

晴しくて晴める山の嶺のかたはあさぎりの浦に五月雨の雲

日数ふる見えぬ空ともならむ五月雨に増る水かさ山の瀧津瀬

五月雨をひとさへかゝる雲のいつことも分かぬ日影ぞさす

五月雨晴

さ月の光る日影あらはれて水まかとせし五月雨の空も晴ぬる

江五月雨

山人の谷の浦の江の岸て舟も流れやさかん五月雨のころ

湖五月雨

常よりも岩ねにもるゝ滝つせの音まさりける五月雨の比

夏月

ほすかくもなりくや白妙の衣ほすてふ月の霜かゝりてし松の梢

白妙の袖にうつりて衣ほすの霧紙竹夏月は下ゆし

たゝ涼しさの松やうつろふ月に雨もふりそゝく涼しさよ

夏月易明

涼しさもまた河波のうへやしてまたゝひ明ぬる夏の夜の月

河夏月

穐のせもまた波のすむらむに月に涼しき夏の夜の河つら

湖上夏月

更る夜もすゝしくさゝ浪の海にうつる月は氷きりしく

浦夏月

こぬ秋のかる光なみに浦波のうちよせけれは月の行くま縫よ

竹亭夏月

前の川竹の葉わけに新なくこぬ秋風は月にこもりけり

瞿麦

折りそめぬ露にうるほふなりうちなる錦なる大和の庭に咲はな

庭瞿麦

蛍見しと程やと凍よし山のつれなさは記憶やは暁ちかきころ

夏草滋

又もなき紙多く繁く茂る縁に埋むかつまひち

夜夏草

秋猶く蛍見むとの程も近し杜の繁る夜の蛍繁

嶺照射

時人のこゝろは深くし筆は書る跡とも思ひて麻や袋え

かげ移るさの影も麻はかにやさしく峰の坑

澤蛍

沢水にも夜かくはあれあしべの蛍繁かに

蛍過窓

言ふかよ竹の葉わけれ夕風に見えすき窓の蛍は

草蛍

蛍めるはそよる蛍れ影は露や乱れし

叢蛍

蛍るか紙繁むしもれ茂しも

蛍似玉

あはれのこ袖の中なるむすひはむかしの夜の蛍も

夕皃

たそかれの露の光もさす人をゆかしき垣ねにさける夕皃

垣夕皃

たひらかつらも草の垣ねにかゝれるやましと夕皃の花

蚊遣火

雨そゝぐつきぬるや賤か屋の袖ふれにかゝてたる蚊遣火

閑居蚊遣

いぶせさを忍てそ住る深山のおくにもゆる我宿の蚊遣火

賤のをかゝる頃にいつも夜なくの狭きにたつる蚊遣火

濱蚊遣火

夕暮はたえぬ宿なくいぶせさやちる濱なる賤か軒の蚊遣火

池蓮

おもし濁によする波そて吹風も涼しやゝの池の蓮葉

氷室

なつしらも夜すよ氷室遠き人も今きるそむ山の下陰 よ

山夕立

秋ならぬ入日も涼し夕立の跡山まつくる影みせつゝ

山路蝉

蝉の声ハ涼しき夕風に猶もさらく聞ゆなり

杜蝉

里遠く月のかけもる杜の木隠にハ露埋もれむる蝉や鳴覧

扇

朝夕の手にならしよく秋風の始めハ捨へき扇ならなし

こん秋も捨し前よの袖かへく涼しくさめ団の扇かな

納涼

吹風も夜はかりなる夕涼しこよる松の始まれ木陰哉

納涼忘夏

稲とこ和歌の秋の始まれて湧よるまてあつ涼しさに

納涼月

夕涼しき月影添ふて夜もすから秋のなかめかな

夕納涼

夕つく月の影涼しき庭にかよく友ある風涼く袖に涼さ

叢納涼

山風の叢の蔭にいつこの海を渡しよるまても涼しかん

夏祓

みそきしく流るる麻の夕川に更よ涼しき涼もよきさかな

貴賤長秋

大かたの秋もありしに今ゝとハへしこそ紀(?)ぬしよ秋悲しも

六月秋

うちわひよ哢ふ和秋の初風も吹や此秋の麻の葉そよく

長月

ゆもよにふ年の月も曇て曇るすわ(?)ゆる(?)ちる(?)なかく涼しよ

長雨

立ぬるゝ袖の暑さもいつぬりし風さそひてこゝろ(?)[illegible]

長昼

こそ(?)より(?)新(?)織(?)おし(?)海ハあつさ日もおこそ(?)ちらちに(?)立やと(?)[illegible]や

長夜

かわれのあそ(?)わか(?)りら(?)涼しさにすゝ(?)ゆふ(?)も(?)[illegible]

長木

いつかその木の(?)神(?)ぬれし[illegible]

神(?)酒(?)つる(?)卯月の[illegible]

長杉

むかしよりの[illegible]

長慈(?)

更ゆけハ蒼もや声そへ人ゆく川の月かなしみ

長条

関ちく牧の夢ゆらぎゝ行衆ありまく旅に夏秋雑ふ

秋之部

立秋風	立秋暁	風告秋
初秋雲	早秋	残暑
七夕別	七夕後朝	七夕橋
二星契久	七夕管絃	七夕扇
銀河月如船	代牛女述懐	聞荻
荻似人来	江荻	荻近枕
原荻	野径荻	荻映水
崎荻	荻欲散	径女郎花

薄露　薄為垣　薄似袖
庭苅萱　蘭薫風　秋花
槿　笆槿　秋曉露
悲露　竹露　菴露
枕露　虫聲滋　月前虫
露底虫　夜虫　聞虫
夕鹿　山鹿　谷鹿
野鹿　野外鹿　田鹿
田家鹿　鹿怨萩　秋夕

遠村秋夕　故郷秋夕　秋田風
秋田露　秋思　月
秋月添光　逐夜月明　待月
對山待月　閒見月　晴月
三日月　十五夜月　八月十五夜
居待月　十三夜月　月前風
雨後月　明月如昼　夕出月
月出山　松月　野月
原上月　閒路月　橋月

水邉月
江月冷
瀧月
湊月
湖上月
泊月
都月
禁中月
社頭月
古寺月
故郷月
月前竹露
月前猿
月下逢士
月生涯友
寝覚月
終夜月
名所月
月契千秋
雁
初雁
遠初雁
湖上雁
河霧
水郷霧
舩渦霧
近擣衣
擣衣幽
泊擣衣
待人擣衣
暁鴫
澤鴫
澤畔鴫
田鴫
野鴫
閑蔦
野分
栽菊
菊花半開
菊久盛
菊満庭
笆菊
笆菊露芳
菊花薫枕
挿頭菊
菊香春不知
秋菊盈枝
伴菊延齢
翫菊延齢
初紅葉
閑紅葉
杜紅葉
行路紅葉
岸紅葉

竹間紅葉

暮秋

暮秋霜

惜九月盡

後秋

秋

立秋風

棚ばたの(?)さへ袂にさそふ風吹とや又こゝろありける

立秋暁

一葉のちるおとろきに暁の夢はさめぬれ秋来ぬと見え

風告秋

此朝け袖吹風の涼しさにまつ驚きの、秋とつけける

初秋雲

今朝よりは秋の空とてたつ雲のたつみの風に靡きそむ

早秋

露ふかくなひく浅茅の末葉よりわきてそよくる秋の河風

残暑

秋風もいつ袖ぬるゝ園の戸に夕日かけさす軒のあつさは

七夕別

人の上はなきかもや絶ぬ天の川年のわたりは契りおきても

七夕後朝

秋露にぬれしそれかと七夕のなかくくもりて雲のかへしは

七夕橋

おのつから絶ぬちきりや星の逢瀬に鵲の橋

二星契久

天の川今日すゝしのあふせにもかはる神代の秋やへぬ人

七夕管絃

浪の音もすむ夜は秋風天の川ひく琴のねのこゑそへて

七夕扇

星合の夜を涼しくあつし世にも秋待ぬ扇の風をそふらん

銀河月如船

天の河浪にさやけき夕月の影やほしのかよふ舟

代牛女述懐

逢ことや異もに隔ん人毎のかゝる頼のいとゝかなしき

月萩

短しな月の秋風の花わかく吹かぬ萩の上露

影清しむ風も上羽の穂にちらく秋の夕附夜の萩原

萩似人来

風吹は袖も人とかへるくも哉ハかへる萩かも

江萩

浦風にこそ吹入江の汐満に根を洗ふらく萩の花

舟よせく目に人の影も入江の浦の萩原

萩近枕

寝覚にやいとゝ哀の秋風の枕に近き萩の上

原萩

さく萩咲原よりも人分けし跡も見えぬ萩原

野径萩

みちよりは袖も衣に乱れてすゝむ萩原

萩映水

花の色の深き影や見えむ水萩の上

水のあやハ底の影うつくしく錦をさらす風の秋花

峯萩

たつ袖よ見る光の嶺の萩のうへにかゝる紅葉の露ぞ光

見よやけふ鹿の啼月の秋の袖ながめても萩のうへ見すら

萩欲散

散り行ハとまらぬ夜の袖小野のしの原や末ハ萩の花八千ぞほし

経女郎花

千種さく野辺の中に女郎花なまめくしらぬハ露しとぞあそ

荻露

露わけ尾花かの葉の末の露ぞ袖かゝく音ある袖の露よ

薄為垣

秋の野や草かくれつゝこゝろあらねへ合ぬ垣根の垣に尾花ぞも

薄似袖

恋ひくにもこゝろなぬ誰が尾花に心こゝろかるれの袖の露さ

夜刈萱

乱れてハ恋くるそら刈萱の下葉ハ乱る夜の秋風

蘭薫風

来くこえし誘ふ藤ばかま蘭の香ぞ秋風さえし

秋花

是も又秋のちくさの秋のせいは咲残る花の露にみたるゝ

槿

いふならむ朝顔の花のさかり露にほころひにけり日かけにしほれむ

籬槿

いつ見てもいよ垣根の朝顔にもおもふ袖のかりのあさ顔

秋暁露

是こそ見ぬ露のことはあはれとも誰か袖ちらす思ひしなみだ

悲露

まこと見ぬ露　ならはゆるめくりとも袖まわりなにをしるなみだ

竹露

さ夜ふかく清ふともうけ音もゆく竹の葉ずゑに涙を露

庵露

露草さむにいもねつゝ庵のとまりしげる草の露り

枕露

あさ風吹やれ秋風あまりみしく我をひとつ手枕の露

虫露滋

浅ち生れおの音にむすふぬこも数よなく虫のねく

月前虫

おり〳〵は迷ふ影やかけぬらん虫のなくねの数添ふる秋の月

寝床虫

夢覚めし床のあたりはうちとけて月影虫の音々そ鳴

夜虫

寝られぬ夜は鳴きて明かす虫もかななかなかよすからむしの鳴くらん

秋草の露払ふも夜の更けゆくに虫や千草の根ことに鳴

閨虫

閨の戸にきこゆる虫の声も身にしみておもふ秋の夜

夕鹿

夕日影鹿の鳴く山の峯にひとしくも秋と深めて悲しき

山鹿

鳴く声の寝覚のかりしと山高き尾上の鹿や声そ鳴

谷鹿

谷深き秋の落葉にかくれつゝ猶もふかき岩根の声

野鹿

鳴き声の聞ゆる鹿の野辺にして妻ゆゑ恋も哀と知るらん

野外鹿

秋おきこめるさつくも萩原鹿なくよるもなほ涙ぞなかる

田鹿

松の戸も洩らで小田に出て小田の秋風に稲葉はいかく小男鹿の声

田家鹿

稲の色も別ぬる小田に採鹿や又雁ちかくきこゆなるらん

寺里あるは稲の門田には鳥もなく夜すがらなくさ牡鹿の声

鹿臥萩

咲萩の下は隠るく鳴は鹿も寄りこそきこえし書いの夕

秋夕

いはまをしハ松をわすれも雲風もさらに夕の身にそ知る

遠村秋夕

さむきや寺ある秋の山もとの松に隠し夕のかね見ゆる哉

故郷秋夕

思ひやる袖の泪はくれてゆくの色のうき里人の物は夕くれ

秋田風

夕日さす山の麓田風ふきて波ひく稲葉の雲ぞ見え行

秋田露

本ぬかず子もなくての稲葉今ぞ見しもとは露に涙の落てぞみえ

秋思

秋きゝてなかりしの色は草葉も露ふかき袖のみぞしる

月

見る程は雲わけて晴て秋の夜のなかばを色ぞ照らす月かな

秋月添光

枝露しけきいく秋の時とたえぬひかりぞ光添ふ空は月さすかな

逐夜月明

こよひはとよし夜ふかく照まさりける月のさかりの空にいりしま

待月

山の端の雲にさえ見え立ちわかさるはまちて月にまちて
よひの間の光も秋の空なりや待てこそ見よ山端の月

対山待月

暮て夜は山をわけ入るこの月見おそくも待かねていらまし

雨見月

見る月は秋のさまにすみて月すみとも色あはくさき

惜月

かりそめなる夜ごとの月の光ありに見る程あくの手に惜む

三日月

中空にありしもみちや月の入かたちかき西の山のはそゝ

十五夜月

曇る影よりし曇るともくもらぬ月にくまなく見えし今宵かな

わかくさのしけきやこよひ大かたの秋にはまされ月のかけかも

八月十五夜

名にたかき光殊にはそのよ夜の月にさる月のいつはなるらん

居待月

出はつるよしひ空に月にかゝれる雲も嵐の猶のちらしは

十三夜月

秋風もまたおほくよすかへる月の名をしりなむ

名ある秋の空にも出にしを雲も霧も後の月はさやけき

又影は月かみれ秋の光にも名にかなふ清き月の

月前風

秋風は払ふとも雲かゝる光をや宿はしむすれ月にあらん

雨後月

立明る夜はすかるこし川辺雨空は月を晴るゝ

明月如昼

深けさしは空ねくむ小日影にしてかゝるこの月

夕早月

いつしかと山端出くも暮ぬるに光ぞ見ゆる月の影かな

月出山

暮るゝまつすゝみしつゝ槙の戸をあけて出る山端の月

松月

松人をまつや月の中にさえ木とさるねのゝ光ひるまと

野月

露もおく尾花かれ野の草隠てむすひ枕くも影もゆかし

原上月

月やとる露に衣の袖わけてありぬ夜は萩の花ぞわ

関路月

波風や関の宿の朝嵐にも物思ふかたの月をこそ見れ

橋月

うちわたし見ても行かひ見る月の影に来る人あとなき紀橋

水邊月

影なれと見るのこゝろとるや瀬の浪にさしこそ月の光さへさき

江月冷

影おちぬ芦邊も月の下風よそにいひつゝおもかはしの江のほとよ

瀧月

瀧津瀬の中にたえても流るらん月にあらしのさそやあるらん

湊月

秋のよや湊によるふねの光見え月のこよひハ寄する白波

湖上月

月すめる風にさそハれ白里の氷ハさそふ浦の秋風

浦月

雲霧も海ゆく風の吹はらふ浦なる月そ光添ふらし

泊月

うき枕月ゆゑよねのあかつきや立渡る潮の秋露

数月

海山の月もいかはかり都まで千重にさえゆく秋の夜の人

禁中月

百敷にも雲井なるらんけしきの花のさそふ月を見る秋ハ

社頭月

天照日にかはらし光今も世に照らしそや秋の月すめる杜

古寺月

鐘も鳴りあけゆく夜のあけぼのも今宵の月に残る

旅宿月

問人もなき庵は蓬生に月そすむらむあはれや庭ぬらん

月前竹露

呉竹の葉末に結ぶ露には影やとる月も幾夜すむらん

月前猿

山人も峯にしづまる月ならず聲わびしく猿もなくらし

月下遊士

幾夜ともあそびあかぬ今宵の月にうかれて秋の心を

月生涯友

笹分けていつこに頃ん秋の月をともに見る人もわきまへこそなし

寝覚月

浦ちかき枕にさむる枕にはよるく ねぬる夜ねしも忘れぬ月影

終夜月

明ぬるし思ひは忍ぶみやこの空を夜もあかぬ月なさける

名所月

清見かたを照れ月の影あかや 須磨の海士の住家夜半八

月契千秋

萬代をかさねし月は秋津洲大和國はひさしかるへし

雁

きくこし越路思へとそこしれ秋にもすゝむ雁の玉章

初雁

秋も猶ゆかしこしちに絶ゝやたゆくさぬる衣雁かね

遠初雁

けふ常いはぬ旅狩る雁かねや都のほかの空に遠き常は

あけ雲の末にかすむ常川も夢や家に見わかぬ一行の一行

湖上雁

さゝ浪のしきもしはなれ浦に聞や都の秋の雁かね

河霧

岸に立河霧晴のくもの中に晴にしはまに渡るゆく

水郷霧

芦や江瀬の浪もさわりてくめしもあはいさぬ宇治晴霧

江湯霧

霧晴に槙の尾山を猶たにくもりもみゆる宇治の川舟

辺擣衣

こめる夜の浦波にもう清紙いつくは風の擣つ衣

擣衣幽

夕月夜浦のうちふく寒織もうちかへて聞きさ衣

泊擣衣

浦風の音はねのなかやあかしかたのこゑ見ぬ宿は衣うつ也

待人擣衣

待佗るせこか衣うつ人にかよふらんわれは音にうつ也

暁鴫

なか秋の霜結ふ夜もしらしらと明る野沢に鴫の羽かき

澤鴫

ゆふこゑや田面の沢のかはきにし水に鴫たつ音のひゞき

澤畔鴫

松のすむ所やうに鴫沢にたつ音きく羽かき

田鴫

山田もるかりほの霜のさむしろにたつ鴫の羽音

野鴫

大野の露をしきたつ鴫のはいはねに鳴音のみ羽かき

蔦

あつくすむ苔の松かけ葛の葉のかへるにまろく結ふ露

野分

草木もいつくなく人にも吹なる夜の野分に吹まよふ也

栽菊

さゆくの香にあかぬ宿の菊又此秋もうへてこそみむ

菊花半開

霜にもほころそやゝくむすびし根ざしはやくも咲菊の色を

菊盛久

君も我も猶いく千代の秋かけてまたにほへしら菊

菊満庭

植置て幾くもさく咲菊は庭を山路とうつしこそすれ

色菊

錦露も色うつろふく咲菊のはなはほしれやとわかれてえ

色菊露芳

咲菊の色にちる袖にかほりて匂ひ路ゆつまし露の匂ひ風

菊花薫枕

つゆわかおくあかぬ移色の友か菊花も枕に添やいもよし

挿頭菊

色もえんと可さしにさしてそ咲出る菊のゆかぬ姿は

菊香春不知

咲菊りさかりくとうつろはやわしる春の花の香をえん

秋葉盈枝

色香もやさ枝に今朝ハおほふらし露に幾しほ染る紅葉

伴葉延齢

千とせことに色かハらしの松の葉の露湖ともなき世の秋も屋なし

歌葉延齢

けふそしる葉の下水にくみてやあつめぬことに枝菊のよせん

初紅葉

雨こそと露もわかくや秋のこゝろかくれ紅葉うつしそめし色

園紅葉

露霜も深さぬ色そ夕深く月さそふや庭の紅葉にふる

杜紅葉

かさなるの小入小降りて紅葉ハ深しる杜のこのま

旅路紅葉

帰るさの家も急かれや旅人の道の行もとハ紅葉

落紅葉

深つくしのこの霜の下の葉ハ今も見るる水の上

竹間紅葉

今さし竹の葉をさ枝の中の紅葉はよしるもれてこゝさ

暮秋

行秋のなこりを惜ぬ也山とや露も嵐も又かゝるらん

暮秋霜

行あきの泪にいとゝよはき人の霜さへ置そふ袖の色かも

行秋よなき袖かはく涙てふむ御袖ハいかにもかし

晴九月盡

暮ぬともこよひはをしまれし袖の露ぞわかれと思ふ秋風

後秋

露菊残ぞ名月の秋もあはれと後の月の道ハ名子葉鳴

冬之部

初冬　初冬風　初冬時雨

時雨　暁時雨　朝時雨

杜時雨　関時雨　屋上時雨

落葉風　落葉随風　落葉有聲

落葉深　嶺落葉　川落葉

窓落葉　田霜　竹間霜

枯野眺望　木枯　寒草

寒草少　寒草処々　野寒草

寒蘆
池寒蘆
寒蘆満江
氷初結
谷氷
瀧氷
湖氷
掛樋氷
冬月
冬月冴
寒夜月
冬山月
寒山月
遠千鳥
河千鳥
湖千鳥
浦千鳥
濱千鳥
浮千鳥
水鳥
川水鳥
水鳥多
網代寒
名所網代
霰
野霰
屋上霰
篠上霰
霰残夢
雪
初雪
庭初雪
淺雪
嶺雪
閨雪
閑路雪
湖雪
海邊雪
嶋雪
都雪
冬里雪
閑居雪
竹雪
竹雪深
雪似花
松上雪
雪埋路
雪中眺望
鷹狩
狩場霰
夕鷹狩
炭竈煙
埋火
爐火

向爐火　炉邉閑談　神楽

早梅　歳暮　歳暮近

歳暮松　除夜　冬星

五節

冬

初冬

こゝろへし袖は時雨の案ゝなかれともさむさや衣うきせむ

初冬風

咋る空は吹こし嵐よりし風の音の冬そ来ると八音文ならさし

初冬時雨

咋日の雲も咋日の秋のなくさめに中にて森は寒し

時雨

風のうへは曇りこゝ晴しも雲やさ氷れハこゝ海のや月の影

山風の誘ふまゝにうつる雲や晴るゝもしくるゝもある覧

一つ空はさへ晴と見ゆや定めなき時雨にぬるゝ山のをちの雲

猶もなく鳴は声もてく晴るとみし山路を晴るゝ夕日影

暁時雨

おしゆくよ月も見残しの窓こしは数さへ聞ゆる風の落葉

朝時雨

明戸出の空はもるは空くもりしも晴るもわかぬ竹の下窓

時雨行雲はとまりかゝる山の端に移る朝日も定かならず

杜時雨

秋更てもみちぬを見る杜の色はさらにぬるとや時雨る覧

岡時雨

松の葉のもみぢも見えて夕月夜さすや岡辺に時雨行覧

屋上時雨

閨に聞時雨の音し板槙の庇は漏こぬ屋の内にさめ

落葉風

村時雨聞く一夜を松の門あけて嵐の落葉積る

落葉随風

さそひこそ風のまにまに散光なる行かた見えぬ空に散人

落葉有声

枝かゝるをミしぬハるゝの音すなて木葉吹ちる風の音すこき

落葉深

いつのまにふりつもる落葉そうつもれて我見えてあとなき松の陰

又ゆくへもしるへもなしことの葉の今よりさらぬ梢なる哉

峯落葉

落積る峯の紅葉もさこそしはしのこの嵐の紅葉を又散す

川落葉

よしさらは流るゝ落葉のさや川にあさ吹風の音つみせて

立田川嶺の紅葉のさそとまや夕陰深く落葉せく音

窓落葉

木枯の落葉しくらし窓の内にまて庭かけて袖吹かへる瀬

流わたる山のさへハ落葉の行まてそ雨そゆくかな窓ハ

田霜

置霜なれぬ夜長かなさ浦しつかに田面にみゆるあさこほり

竹間霜

植わたる軒の日影を待得しや竹の葉さやかにいさよひの竹

松野眺望

冬枯も霜結ぶ草葉朝日さすやまや色桂の林のことよ

木枯

春秋にいろいろ見しや落葉せぬ常盤もおなし木枯の風

誘はれぬ松の言葉さへこそちるらく落葉をさそふ木枯の風

寒草

すゝきには秋のわすれ草こゝにもあまし野辺の霜に枯すゝく

寒草少

葉も霜をもおく庭の面に霜のすゑは枯く残る

寒草処々

哀しこし霜かる野らや秋の名も所々に見えしあさこ

野寒草

おりし冬枯のへて野には霜さへこえぬ萩の古枝を

寒蘆

日数に霜の降るもこゝあしの中なるへき池のみぎはも

池寒蘆

枯果てゝ数くなる芦の葉の霜に伸る池のさゝ波

寒蘆満江

浪にたれ風こもる霜枯の入江のこゝろむすぼゝれしも

氷初結

岩ねにも落あふ音もたえゆくは水の上に昨日より氷ぬらし

谷氷

鶯はなるなきまてくも出かねは氷にとちる谷の岩かね

瀧氷

瀧の糸なにほる岩ねよりけ絶くむとる落ぬるを絶ぬ山そ

湖氷

さゝ浪もたえてよるべくも舟の跡なる氷る志賀の唐崎

掛樋氷

絶々は掛樋の水のおとつれも絶てねさめや氷に清らむ

冬月

月はなをやこほる秋さへ寒き夜の袖の嵐の風はよくなん

おはしに移くも空の衣紋寒し冬行くはたえぬ月は知し

冬月冴

更行とそらにみえぬる霜もはらぬや光も寒き冬夜の月

寒夜月

霜の上にこほる光も又さえてはあらし吹夜の月の寒さ

冬山月

誘ひこぬ月のつれなさやいとゞ照まさるらし松の月

寒山月

嵐ふくひまにすみゆく影寒し雪なき松の山の端の月

遠千鳥

ゆふこそ遠ざかるらし浦浪のよるともこゆる小島に通ふ千鳥も

河千鳥

村千鳥なく瀬もやこほりの浦の川あらし吹くらん月に鳴く也

湖千鳥

夜もすがら妻こひかぬる浜千鳥こゑのみきこえしも恨みなく鳴

浦千鳥

あと見えぬ友千鳥も友呼ぶに浦風はやみの浦浪にゆく

濱千鳥

ゆふ浪に波もひとつに濱風の吹くにつけても友よぶらし

い湖もあさ汐のこゑなき浦千鳥潮まぬ妻よばの数つらねそ

浮千鳥

立浪にあはぬこのわかれもあらぬ波の名残うきみる鳴

水鳥

花のこして多くの人めしつも猶あまたの人も鳥たち立ち

氷ゐる汀のつもれる跡さへそつきの影く残る夕の光寒さ

川水鳥

山深き人もつすハ如川遠きやまきら越ゆく世ゐみる鴨

水鳥多

むらこまくハ水かもそこ見別き見ゆまも絶えけるむ池の水かも

網代寒

かゝり火の影はもさゆる川風袖にはなくや河なみえる浪

名所網代

伊かのる瀬くのかゝり火あまりて燈ふ道よ宇治の網代木

霰

あられ降やさらに奥なる人に山もと霰ふるなり

野霰

一むらの河ゐのあたりにかけしまや霰ふる里ゐ風寒き人

屋上霰

あす川る板屋の霰ゆきくたるらもあまたが落る白玉

篠上霰

ふましと見しゆるや霰のさゝの葉にさやくハむの夕暮の空

霰残夢

夏たゝ川沖の紀国の岩浦くらべは数もやゝ出来ぬらぬ

雪

降つもりて枝もたわゝの今朝の雪に柳の糸も色もとゝまる

白雪のうすくは積ると消たあとしも跡よ道に和田鹿も杜まし

初雪

庭の面は黒土埋もおちるは残の散くやこゆる今朝の初雪

庭初雪

こゝはここへ猶やあらたのしめね兎見くまゝ消ずにみて初雪

浅雪

消あへぬ程りと思ひ節きこの間に生そはこへある庭の苔

嶺雪

峯ゆくむら雲にさ和歌かも初雪いつくあらし浮かけまし

閑雪

松たあらしと生事しりはこはしも朝の空は跡とぬ花まし里

閑路雪

窓の戸にしめる道をいとふにも行きたみちの紀今朝の白雪

湖雪

生ひよる波かもあるりか幸山や一本の松の雪の浦の

海辺雪

沖津風空もさえ行夕暮に雲もみちぬ雪のしら浪

嶋雪

浪の上に積るとも見えく夕日の嶋の木末にかゝる雪の一村

都雪

いつくにもふるはかはらぬ雪の見るめむかしみやこのもゝしきやかく

冬里雪

明ぬるも外山よりよぬみちもあらし雪深き冬のをかの里

閑居雪

淋しさは秋ぞこや草の庵にいまそ人跡も雪よりまさりゆく

竹雪

寒さやまよあらしこみぬれし窓の竹に夜ふくるまで雪の音ぞする

竹雪深

源にみえともなしや御園生のすゑなる竹の雪をおもみ
埋もれつむ根のやけさ雪の上に積るはいさてもむら竹

雪似花

花ともこそ見えし一枝もおりなむ風をまつ雪に
よあゆかきもとあふ深きも降りはつもる深き雪の山松

松上雪

降つもる色紙あはこの枝よくさえこもくろも松の村立

雪埋路

此ほとを世見えし跡も昔となりて埋もれし雪の跡なる

雪中眺望

跡たえてしつみやあかぬ明る日の雪にこもれしも出ぬ此山人

鷹狩

こ鳩なも手にこわ川へし狩衣萩すり出る袖の手しおは

狩場霰

明日もこむ今日そ霰の降とそ見もさこぬきの狩場子

夕鷹狩

ゆるさきつこ雪く狩場霜に帰る路さへ清見の影も添まて

炭竈煙

山遠こわけくもすのる炭の煙のはかなくは路は煙いそ

埋火

埋火よむかつも囲炉の内紀海の風き袖さむくして

炉火

ふし鳩こし思ひ出そめにとも身かくあきうつみ火の世

向炉火

わきてつゝむとも深くこもれたる埋火のもとせ

炉辺閑談

埋火によりそひてし世話にあかぬ昔の夜ハ更ぬらむ

神楽

榊葉の神遊のつゞみよくもてはやす神垣の庭に

拍子の声もさやかにすむ夜半の笛のおとに神さび行ん

早梅

冬ごもる窓にしけく咲梅の花もや花の春を知らせ

歳暮

年の内に日数はいくかいはんとに打ちわぶくやゆく春の情

歳暮近

こよひにもこゆ庭すゞめしかもの山の端に春を待ちまつ

歳暮松

年さむき嵐の松の色の内にかはりてやいくよ春を迎ふ

除夜

枕の上の矢張さく入る夜半に早くも春に迎えんとせん

冬星

ゆきかへる星のやとりはいくとせか今年もまたの末営めぬ

五節

いにしへの乙女の姿面影は猶もさえぬる雲のかよひ路

しめのうちの雪にめくらす袖のうへは数ある人も節に合つゝ

戀之部

言出戀　　忍戀　　忍久戀

寄月忍戀　　時々聞戀　　傳聞戀

纔見戀　　尋戀　　初尋縁戀

尋在所戀　　不知名戀　　通書戀

返書戀　　祈戀　　祈久戀

祈難逢戀　　祈不逢戀　　誓戀

人傳契戀　　寄海契戀　　疑真偽戀

不逢戀　　頼不逢戀　　待戀

契待恋　初逢恋　祈逢恋
適逢恋　逢夢恋　急別恋
惜別恋　後朝恋　歎無名恋
逢増恋　厭恋　悔恋
逢不会恋　顕恋　依涙顕恋
隠在所恋　久恋　恨絶恋
春恋　春見恋　夏恋
秋恋　秋思恋　冬恋
驚恋　稱他人恋　觸事思出恋

隔物語恋　竊窕隔簾語　恋衣
恋本結　寄天恋　寄月恋
寄星恋　寄風恋　寄雲恋
寄霧恋　寄露恋　寄雨恋
寄朝恋　寄夕恋　寄夜恋
寄山恋　寄杜恋　寄関恋
寄橋恋　寄河恋　寄海恋
寄海人恋　寄崎恋　寄浮恋
寄石恋　寄田恋　寄井恋

寄床意
寄簾意
寄菅意

寄草意
寄藻意
寄沼縄意

寄篠意
寄木意
寄花別意

寄松意
寄杉意
寄宿木意

寄鳥意
寄鳩意
寄雞意

寄鷹意
寄猪意
寄蛛意

寄蚕意
寄戒栖意
寄鏡意

寄衣意
寄紐意
寄硯意

寄筆意
寄笛意
寄弓意

寄手向意
寄笭箸意

恋

言出恋

紅の涙に紀ゆせるにかるも衣の露れ降出衣るかな

忍恋

恋しあは我よ中に我共へ我かる今やとゆるに君やかぬな

忍久恋

年も経ぬうち出ぬ中れ思ひこへ水のさゝ浪中こすて

寄月忍恋

涙さへゆるさぬ袖に色とわきぬ月や心ゆは漏にととむらん

時々聞恋

人傳にまれにきゝそめしこゝろハわれからむ夜の月は思ひつゝ

傳聞恋

語つる人さへ今は絶つゝ傳しことの葉も又かはらぬなし

纔見恋

あやなくも見えしかし小車の下すだれこし誰とも知らで恋わたる歟

忍恋

つゝめどもこハみわの松ひらきつゝても音せぬ人に夜な夜な人とや

初尋縁恋

菅の根のわけにあふもひさしく露の糸知りし神代の縁にや

尋在所恋

秋津身にしも松まつくる門をあらし尋ぬるハ不知人

こゝろをしのかよふわけに教しや語りし人の言の葉しるき

不知名恋

たづねしや見えしのこゝろこハわれなりの名も知らぬ契りをば

通書恋

なかなかも見ぬ面影に任せぬ中川にかよふ玉章の跡

流れゆくハいかにかへる数ならぬ身もかよふ中の契り中川さ

返書恋

人しれす書もおくかへしの玉章と二たひみぬのかたにもかけし

祈恋

いのらなむ年へてわたる逢坂は関守神のゆるしなき身を

祈久恋

たつねよの久しき契しなかしくいさめぬ神のちかひたのまむ

祈難逢恋

かはしなく年月わたる恋路もいはみかはりのあはぬなほ

祈不逢恋

ここの山幾年月か松の葉のつれなき人にわかれきぬらん

誓恋

ちり初る紅葉に契る人ことのすくなきめにも年なきに流

人傳契恋

人伝にたのしむやまたちかはらぬ契る事こそかはらさりせ

寄海契恋

何しにか小あやめの海とちきりけみるめはかはしなきぬれ

疑真偽恋

神かけてちかふはぬ情よりは偽のあらせいつはりもおもひしるのみこそ

不逢恋

思ひつゝし坂のこなたハわか逢ぬ中にかへさのみ行く

稀不逢恋

たのめこし文こそ今の光なりしとおもへハいまのわかくさめほして

待恋

来ぬ人を我待もあかし思ひ文待わひぬいつになるらんとく

契待恋

契りしハ今宵ならさわの夕こそ人をまつらん人知やうき人

初逢恋

あふ夜なく袖の後くちてり若草の新手枕ハ夏不絶よ

祈逢恋

流れくの末もこなりし貴船川祈る人ある中ならなむ

適逢恋

七夕のつま待よりも今宵のさらにまさりぬ契りとも哉

逢夏恋

いさ寝しもわか袖ぬらすうてねの夏なき契わく人をまつくさむ

あふこそと待や枕い浮かて待にし夏紀の夜のかくさめほして

なつ寝しや袖くの袖の中に宮とこに戦の夜夏の夜なかこなハ

急別恋

こよひはやいそくなりしハ鳴の音こそ[illegible]あかつきのかね[illegible]

惜別恋

あかれぬハ袖ぬれてかくる君かゆく中空ハたちわかれの今朝のわかれと

後朝恋

ぬれぬるもましの[illegible]の[illegible]みなそてあかぬ別れの名残の袖

歎無名恋

ぬるとみし[illegible]かなしきさわるゝ[illegible]中にとくせぬハよしなき

逢増恋

あひ見ぬのかなしくよあひ見の身[illegible]ましらくもあひ見しのちハ思ひさへこそいとゝまさる袖のうへにぬれましたれさそぬれまさる

厭恋

さそふとハ誰かかきぬ[illegible]いとへともしのゝめそよいとゝ[illegible]

悔恋

おもひねのこれハと思ひ[illegible]もすむることなきねかなしき

逢不會恋

いつまての[illegible]今一たひの手枕よりもとものあきの夜もなき

顕恋

いつまでか行末かけし契世にまたきし君か人をもつゝましきみを
露けき袖の形見とも思ひ出の涙に出させむとしもなき我ならん

依涓歌恋

あさましく思ひし袖の涓川うき名も今はかはるまに

浪在所恋

妻ならぬ名をのみ立てゝ我よりもいはてとふなと頼む秋山

久恋

思ひ川あやなき逢瀬も春ならで涙の露はいつまで袖ぬらしけむ

恨絶恋

行末かけしことはわすれじ絶し人よりもくやしきうらみかねつゝ
ことくもの絶ぬといひしうき契思ひ川淵に身の恨をぞ見ん

春恋

いとはやも若菜の心にてつみくる今日のたのしみはなし
今日は和かなるくれなゐのいろやも涙の袖や思ひをぞかき
かゝる身をいつくもあるかなしさにそれとやいつはらぬ

春見恋

見る時の袖のなみだに霞ぬる春の若草や露はしらぬも

長恋

逢ことも夏のみしかき旅の夜の夢もさめて後遭ふ枕

一重にもならぬ中なれは衣わかるれさへかなしき哉

秋恋

契る程なく結ひことあらハ此夕おもひハよわくし日ころも物思

さらてこそいとゝ人のこゝろ袖のうへの涙によるへの袖つよ

恋衣かさねて猶かさなるを秋の衣のかさねかさぬるとよ

秋思恋

秋風の身にしむ声の夜半にはまつ人をやとおもひわびしおきゐて寝覚

冬恋

思ひやる袖さへしらぬ袖ハ我袖も涙にそしめし

冬の夜もさえぬる人の袖しあらハいつまても衾かさねて

鶯恋

鶯ハ梅にくるゝを猶まちかねのことはや春しらぬ風の下萩

稀他人恋

恋しきはいかにせよとか名のみたちたえぬいつくをはてとき

暁事君出恋

月やとくやもつれ近風にことの音まさるや

隔物語恋

かゝる由も言の葉かゝるめ山路に帰つる関路の川やりこくん

窈窕隔篇藻語

んさゝえて帰るあるの礼むるまいつけるかれあるいろ人のをして

恋衣

恋衣うるかく人恋の下にも見えぬさ涙よ袖おつるをけ

恋本结

契結のことの葉わも忘れぬ身よ長くこそそれ八幡の神人

寄天恋

逢ふことのあまの道もこゑまほし行こえは天のうきはしなくよに

寄月恋

あちきなく逢ぬ夜数のこひしくも恋ひころ我夜恋ふる月

涙さへ落ちくあやしく更し夜の月よ知る恋も我は知らぬる

寄星恋

今宵わ逢て逢見ぬ星の面影もさえなる今宵八さこそ冷ゆ見

寄風恋

吹く風やおもかわ吹く恋もうへの雲ある風の今宵八

寄雲恋

我思ひ行きゝも人のつれなきよあさ夜の山も雲かくれせば

寄雲戀

あはれのや雲まの尾上と見し日より青ぬこゝろく晴ぬ思ひを

寄霧戀

霧のまに鳴と思ひし鳥の音もきこえてやあこの身ハ消ぬへしよ

寄雨戀

共ハの涙ゝ袖の雨そゝき紀ゐくや如ゝ袖紙まくん

寄朝戀

今さよなるゝ紀ゐ朝紙ゐさまよへくて□ゐの床に見ゑし朝かほハ

寄夕戀

恋しさハ又暮と待ゝ夕暮もきわる人の身ハ紀

寄夜戀

逢といふ夜の床もあまた夜か夜ハいとしもよふる夜の夢にハ

寄山戀

行まてもあさし紀ゐ紀ゐも恋の山ふかき道にて入

いさまこやわかこゝろほし紀ゐのこほ之たかき山よりも高きハ

人ならぬ情もあらぬいる本山いひうこのさ人こゝろこもかし

寄杜戀

かしわ木の杜の下露もしらぬよるもしのふなかきや見ぬくさの月ん

寄関恋

立帰り幾夜か君にこよみつる関守浪のひまともなく

寄橋恋

中たゆる久米の岩橋なかしかも一夜ハわたし契りなりせ

あやうしな人の心のかはりゆくよの道にハ絶ゆる丸木のかけ橋

寄河恋

あふせともいつを頼みの涙川とはぬ憂き文中川よわたり道なし

寄海恋

海士のすむ浦の海へや寄してん見もかるめあらばなき契りを

すむ人の結ぶ契りや知ると和田川海の沖津塩あひそ人をこそ

寄海人恋

恋しやと里の海人も涙なく見なるる海士はからきこ八

寄崎恋

かくやと人のかはらぬかわりてもいつこの崎の海士なるとも

寄浮恋

恨しらや人のこゝろのうきしつむ涙川ひよあさる波の浮く九

寄石恋

思ひあまる秋の夜ハ知るにあはぬくよそ石なるハいかに恨みん

うこきなく居てわするゝ秋こそはあたり(?)の石あやなしぬらさ

寄田恋

秋の田のかれはにも人のこゝろさへ風になひかるこのみともなきさ

寄井恋

契しも誰かや浅香山の井のあさくも人に思はまさゆく

寄床恋

こゝろ見ぬ結ふ枕か夢にはいくよやこなれる床の涙わ(?)かな

寄蘿恋

んこには居まく流をふかくあまこれ見はゆきしあまえこ流の日にも

寄苔恋

いへまえよいつるは山菅のやまあやまた(?)おもひこまえ

浅茅生のあさくなれ(?)思ひ(?)にも半(?)川見は小菅見は(?)あ(?)さ

寄草恋

人こゝろまぬいなかむ神草のうつるまく居るく(?)ゆすかわらも

寄藻恋

秋そう(?)流るゝいもあらぬ石のこかけ川にも人よかくせよ

寄沼縄恋

なかやさいつまての沈のうきぬなきをこえさ人の心えにもしむ

き

寄篠恋

さゝ原ことの葉繁くうらしやすくて結ひし世をそ恋る

寄木恋

みこもりにふるらん人をうらわかみ思ふともなほ忍ひかたしと

あらはれて契りし事をみすゝ恋をは君にまかせる

寄花別恋

留まくも花もうつしとゝむる袖の露にあはすゝぬ人の梢かな

寄松恋

逢事を松にかけて待程は秋もうつろふ色の身に添へる

つらしとも恨しも終にあふまつる契りのすゑの松山

寄枕恋

夢にしも何ことわりぬ恨繁く結ひし契こそ松村

数見秋の枕のかはらぬ思ひそやかり人もなしあはれは

かくしても見えつゝなくてあやなき年を経る袖

寄宿木恋

根もこれなすし頼もしき木の下にいるる人の色もうつさく

寄鳥恋

わかしくはこふ世のさまそ憂かりしとも契りの時分かるゝみ

歎くまとよ何となく鴈の音添て秋の寝覚て鳴らん

寄鴈恋

鳥の音よ独寝ならは恋しき人の衣々ならくハうしと思ふ夕よ

寄雞恋

一夜ねぬ恋しに聞し鳥の音は鳴ことのうきものかして

寄鶯恋

春しらぬ山の鏡の笑にこそ見にたつるまし我恋や
かやまし

寄猪恋

独ぬる床のかはも枕絶く夏の夜に人とあふこころよとふ床にも

寄蛛恋

さゝかにのいとかりも知れこと葉に人の心あらはれて我恋

寄蚕恋

たらちねの親のいつくしむこころもやあはれ（き）

寄我栖恋

海士の子とも涼しも我心やとなるかれ時なれにたえ我

寄鏡恋

よそに鏡みつゝかよふ恋のかやうものに我よりも影よりも人

かくこし歎こハまし夜のはて身よと思ふ人にいかわたらん

寄衣恋

わかこひもかへしく夜も夏もこひするの衣のそてはかわく
逢ても猶あかぬ手の衣も紙よりはうすき人めこそはかりけれ

寄紐恋

わかれてもあはむとそ思ふいもか紐のこゝろにむすひし衣のほそ紐と

寄硯恋

ちきりおく数の夜ことに恨しそ涙も硯の海の深しとや見る

寄筆恋

うれしくも今見る人のかくこそ文にはまとふ筆の跡なれ

寄笛恋

君か声も絶ぬ都には笛竹のよなよなくも吹そふ音ぞ聞し

寄弓恋

身は梓弓やゝ引ても心よわくたのみしも
とし返しなくわか思ふのむすひこゝろよはき心も弱りゆく

寄太刀恋

一すちのみちははけつかたへくらさゆ切末も我紙やわかれん

寄箸恋

とりしむる手はかてこれそ紙も知てなさこし　うき和歌

雜之部

曉雲
徑雨
名所山
名所路
名所松
池久澄
名所浦
名所市

嶺雲
遠村煙
澗水
名所原
水石契久
名所川
名所里
故郷

澗戸雲鎖
遠山如畫圖
松山
名所橋
泉石有佳趣
海路
行路市
故郷木

水郷　古寺　旅
夏旅　秋旅　曉旅
朝旅　夕旅　夜旅
旅夢　旅行　旅行友
旅宿　羇旅　羇中聞
羇中嶋　羇中思都　羇中憶都
羇中衣　羇中浪　旅泊
旅泊浪　旅泊夢　山家
山家雲　山家春　山家人稀
山家送年　田家　田家秋
田里　江菅　江草
巖頭苔　石面苔　岸竹
岸頭竹　竹不改色　竹追年友
薄暮松風　嶺松帯雲　禁庭松久
松為友　松有歡聲　松有桂色
嶺椿　林鳥　晴天鶴
鶴立洲　浦鶴　芦間鶴
鶴馴砌　鶴伴仙齢　鶴追年友

名所鶴
對亀争齢
暁雞

隣里雞
寝覚雞
鏡

枕
晩鐘
閑中燈

漁舟
眺望
海眺望

述懐
獨述懐
寄雲述懐

懐旧涙
夢
市商客

樵夫
岸頭傀儡
妄遊

詔書
輦車
七夜

伊勢
玉津嶋
神祇

春神祇
暁神祇
祝

祝言
春祝
寄道祝

寄國祝
寄榊祝
寄道祝世

社頭祝
寄神祝
寄神祇祝

世治文事興
釋教
庭前柏樹子

禁中佳趣

雑

暁雲

いつまでハ明る夜ことの面影残るも身の人の峯わかるゝ雲

夜妙しき月の内かゝよこ雲にたなびくもわたる山の端

嶺雲

峯高き峯さの横雲の隔にしのこしてやる一むし

洞戸雲鎖

さびしさハ岩の戸ぼそに住む夜もなかなかくも雲やかゝる

徑雨

行人もあしうくかゝぬ露芝のあふれ出る里の中道

遠村煙

峯高くかゝる日影をさしかゝる山もとちかく又煙なびく哉

暁山

雲かゝるたかねも光をのこしかゝり外山はあけつゝみゆ

遠山如画図

霞立つ川山をうつし絵筆にもかくこそこのめ峯の面よ

名所山

名にしおふよしの山は吉野川根目の桜あまねく高く咲やつゝある

澗水

先こほる瀬々流れや谷の戸の水の紅葉のしたこほるらん

松山

ありし昔の外山もおくも植ひろく繁りや見ぬ松林なるらん

名所海

こひしきや明石の中道明る紀の世にかへる浦人は今もあると

名所原

西新野みよかの原子ふるかとも今さかりの詠もいはゝし

うしこしの山田の末は立松の緑をとこもみえける高井も

名所橋

河のうへも絶えぬ道しあまの河わたる瀬の浦は棚橋

名所松

みるしぬ神の浦かくさゝるとも一夜の松の万代のこゑ

水石契久

結ふる千年は影も池水の底のさゝれの数りつくへ

泉石有佳趣

動かぬ君はさかるや万代すむへき宿の池の心ゆく

池水久澄

いひそめし春の緑ならへく幾世すむへし庭は池水

名所川

人の上の淵瀬をしらぬさゝにも見ゆるやなかるゝ飛鳥川浪

海路

おほつかな波の来もたえぬ浦風は舟まつにおしの船路は

名所浦

名をたにやさはなき小似ぬ浦とは焼く塩やの月煙も

名所里

高砂の家にめつらしきあそてもやまるゝ小情の里なる人

野路市

誰見ける袖ふく風にゆきゝとや今朝の市もゆきもさわかへす

名所市

かはくつり海目数もとほくにあつまれと為の市人袖つらねゆ

故郷

世の色もかはりてや古郷の物なる里は今も紀の家も絶ぬる跡

故郷木

別れしも幾年経りし物なる里の物語はのこる松のことのさ

水郷

宇治川や宗積井の汲み流れもいさよふ浪の幾へて流る影

古寺

古寺のあれたる川のふる一夜経こゆる井の鐘はかなしく

旅

都出しはおよそひとつや旅寝して行く国々も経ぬあつむにも

長旅

茂かつて古のまる萩にわけつゝ首越ゆる浦山道

秋旅

深山路や紅葉の渡に染むる木の葉くわたる旅の夢くさ

暁旅

旅枕うかれし夢路尾上よりひゞく鐘のおとに驚かれけり

湖旅

さゝ浪や湖もさこえわたりて鈴鹿山かゝる湖月も知らぬ旅ねかな

夕旅

入相の声にさそはれ草枕夕の空はさびしかりけり

夜旅

旅衣よるひる道の行里にかへるはかしこきやらむ

旅夏

浦こえてすぐる旅ねは浦風にいそぐ舟人の夏のかけくもなし

旅行

あつ月路をかへし尾上にまよひ夕の空にさそふ山

来たる旅の道ことに海山にこえもとまらぬ雲のゆくへか

旅行友

君ゆゑといさとふところは神もしる山もありけり

旅宿

旅ねせぬ旅の宿りのいかにさびしきいくよ夢をも見まくほし

羇旅

かさねこし日数旅の中にたちさえておもひしもおもてまつく

羇中関

わかつる山路のつましたにかぬくや中ここえゆかむ関のをのと

羇中鳴

遥くむかひ遠くなひく鳴くれのかるかすみもやなみのうへやかな

羇中思都

かゝみ山あれぬやしくかくてゆゑよ旅の空都もいさなく

羇中憶都

忘のこしてこしくぬるに出し田川いさよ都をこひわたるかな

羇中衣

まてみれはかねやしむる月かけむ夕ゆる山の雲もあれは

羇中浪

君かすむよう都の月にほのかにも都の夕暮れのまされと

旅泊

鳥鳴うきよの月の暁にさゝこし夢をとおとろかす声はして

旅泊浪

いつもとこまるなつみ月のいやましにゆかくるゆくよは浪をまくら

旅泊夢

ゆらの舟よりわたりて尽し爰の旅ねはましらし神のなら

山家

誰すみし世にも人をも恨みなきすみかのうき身を奥の山陰

山家雲

捨し世にかゝるその身山ふかくも住かは雲の晴ぬ詠は
雲埋む山に入くもなれわかれ世にしへ道はたえてん

山家春

雪こもりまうけしるくは猶春の詠もやかすみこむ山の奥里

山家人稀

山の川の流れは早き人も訪ひかくやさしにかゝる峯のいほりは

山家送年

春秋とわかれ住むくらし山住みの老人もかへらぬ年や暮ゆく

田家

年へ(わが山田守るわかのまゝ)ともなれる住居やいかに暮しくらして

田家秋

かくれなき住む身も馬もまつしかく人にまかせ文小山田の秋

田里

絶くやむ田守る里の秋の暮こ物人かへるとや鳴ん

江蘆

見も又なれぬいつやみしゆふかりその蘆のはな哉

江葦

春雨にみわたしの遠くかすむはなりの江のこやもあかねに続く
芳原

巖頭苔

むす苔も猶さしてふる岩ねにいつくも世ゝの契かはらん

かはらぬ色の松の下枝や古き岩ねにかゝれる苔の衣手

石面苔

山姥の苔もむすまでのこの石も年ふりてそのよすがに経ぬる夜もしらず

岸竹

石根ゆく水のうへ寒くなりて竹一むらそよぐ川風

さしねゆくあれさわぐもすそもにかへしぬ路やなびく呉竹

巖頭竹

此川の底も千尋の岩ねや岩ねにしらぬ呉竹

竹不改色

すみなれる人の友と植し竹千代の色やかはらぬ庭のまし竹

竹送年友

我友とみるもの呉竹の千世経るまでの九重の春

薄暮松風

みにしみてゆふくれさひしき松風やさそふ入相の鐘のひゝき

嶺松帯雲

一むらの雲峯にかゝりて松のはにしくれはいさよふ

禁庭松久

よろつ代の雲井の庭の松か枝に今ちよかぬる千世のかすかな

松為友

数ならぬわか身の心のかはりなきれにさしひとつ友やたれなくらん

松有歓声

ゆふくれのうすき夕風ものさひしきもなかりにゆく世よりこそ

松有佳色

みとり添ふ岩ねの宿の松かえに千とせをかけて神やまもる

巌椿

ちよふへき松の千年に雲林に八千代の椿たくひこそあれ

林鳥

深山もあへす色よ林の木葉のゆく数をしる枝のいへ鳥

晴天鶴

日の出るのち千里に晴るる日影さしや天つ空雲井鶴の声ものどけし

鷺立洲

吹わたる川洲の鷺やかはいらしもつくしぬ芦角に丸友さ和し詠

浦鷺

かの人のたとへ遊ひの数かぞへ今夜にすむとは見るや松の浦鷺

芦間鷺

見るかけ月にの白鷺あつまりさわしく芦の葉ふ田鶴鷺の村立

鷺別物

色は雪にあらんやのまゝおもく濡れめすまゝ羽の白鷺の老衣

鷺伴仙齢

立ちよる洲のうち折る仙人の袂友の鶴に並ぶるよるひと

鶴追年友

此宿の千とせ松の友鶴もいつか重ねて千さかへん

名所鶴

すむ鶴は声しられやわかの浦の世の中に詠人を和歌の浦まで

打渡田鶴の田鶴や声を思ひ出ね声しにも流人の齢かさねん

對亀爭齢

池にすむ亀とやいふ千代ならし見とけいはひ争ひをそふらし

暁雑

菖蒲ノ如暁庭之れ現とも松とふし節ふともれ白川ニ色

隣里雞

山家の鳥啼ゐしけ里もるやしれ外の庭もるく八ヶ月

寐覚雞

寐る暁よの鳥ヶ声も偲ろ夜くれ猶さ先ねきしく

鏡

わのこれみゝ節紙之川れゝニ和紙あて汲光かね華

枕

如何ニ和世紙わ涼節ゝ山人のすらにあわ如枕かゝへ也

晩鐘

暮ゝ汲入わの音之夜なゝゝ山人ハニ銀よこ音の古てゝ

雨中燈

嬉しさも夜ゝ如出きゝひ小路段とゝ如ゝくゝす燈如也

漁舟

漕出く夜紙続つ如ゝし久汲く月入如ゝ磯の海士如釣舟

眺望

山野色の寸秋や芝ゝ頂也雪ゝ白ゝ菖如紫山ゝ汲也よ ちゝ節さ

海眺望

住江のみるめ地につくうへ浦や沖津塩合にゆらるゝ舟

述懐

身をしすなる事かなはせまほしき和歌のみちこそやまとことの葉

きゝしくれ道にいたりましくゆかしや浦のよゝをたに

身のごろしますわたさらぬおなじ世の物いたはさもあらはれ

独述懐

おもふさへ老らく身ちる罪へ人になりゆく道や衣かな

出雲述懐

ひに物ぬ思ひの雲も消ゆるはなちくはかる事の上へ

懐旧涙

今絶の事に昔を思ふ袖ぬらしいにしへまでゝ涙かゝるよし

我ためこゝろしやちく月もたにも二十年のむかし恋しは

夢

月も夢もみつ此ころかや長き夢にて此の世の中に紙

市商容

うるもいへ色々ゐまにかはさこれも我身ひとつ川ゆく舟の人

樵夫

朝もゆふも世に柴つむの我まかせ人はゆくころしき浦の風や此

街頭傀儡

まれとなく又来る年の市に松の稚く行く人や誰れ

妻遊

百歳の世も夢はかなきことあまし世はかり人こそのかる子

詔書

みことのり君のくだせる一筆はあまねき御代をまもる世の説

輦車

ゆるしある恵も深くゆる君の玉の戸ほそにのぼる海

七夜

めでたしと今日の七夜に名のそれに祝ひ初めてある宮柱哉

伊勢

ちはやふる神路の山に祝ふ神すめらぎの天津日嗣

玉津嶋

いにしへの衣通姫もひめとやはらぐる玉津嶋姫

神祇

瓊矛や神代にかへれ国の始め天の浮橋

あしかびのあさき契もこととはゞ神代の道ぞ知る

春神祇

うごきなき代々をまもりしさかき葉や神世の初卯のしるしなるらむ

暁神祇

あかつきの手もたゆく年のはじめかな今や山辺の声のまつりに

祝

三笠山神代の光さしそへて榊葉しげる春のはじめ

祝言

春に先立つ四方の浪風もをさまる代のしるしや知る人

限りなき民の家々もゆたかにて風静かなる世にかなふくや

松の葉の数なかなかにもあまたなる千世のかずをやうつす源

春祝

君が代は柳の糸のかはらずて世々に人の心ながくさかえし

歌道祝

あまた年神代にさかえある道の光の大和言の葉

歌書祝

真心の光に見えて万代神代をてらす神の光ぞ

歌林祝

八雲たつこの言の葉を八千代まで三笠のやまとことの葉

歌道祝 廿

秋風の吹たえても有経し海の底までことの葉萬代の書

社頭祝

うきなきも君か代に年ふる御代もあまたの御殿の大和言の葉

寄神祝

祈りつく神の恵にひく綱のたえぬすむこゝろ神わたる也

寄神祇祝

君のためしれと祈る宮居のおきふさつよくちかふ神の社かな

世治文事興

治まれる六十余州の御代の風吹すみわたる世やすし

釈教

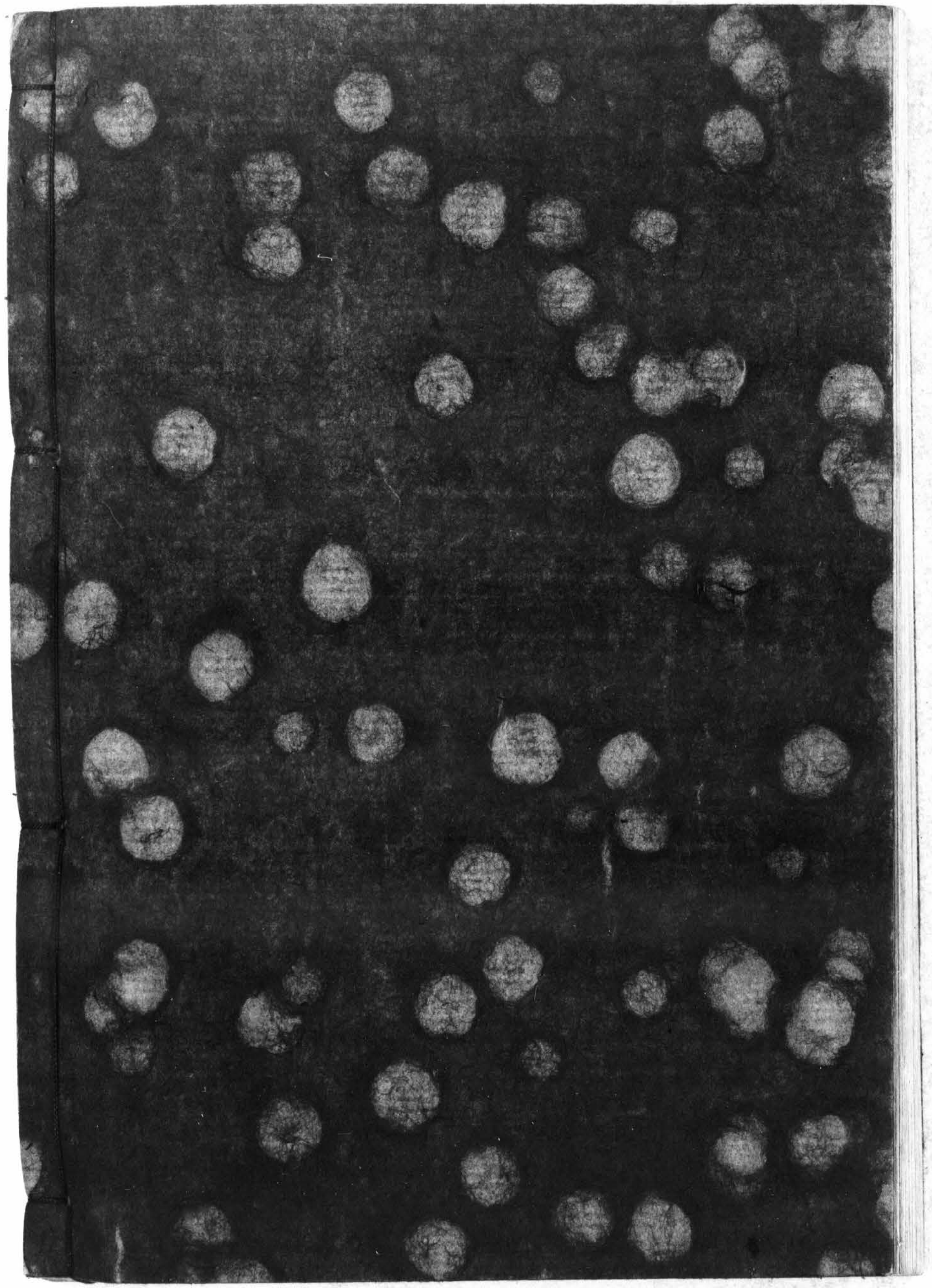
いつはりのこのさとりはつき老やこゝろもあるはかなき世に涙

秋ふかき庭の葉も仏の御ことはや散て花ぬ物の葉こそあるらん

庭前柏樹子

深くさとりてや西からくる柏の木こそ道の庭の松を

禁中佳趣

萬代の春に和らく梅に伝ふやさしき代の和歌の道ありぬる書も

九州大學圖書印